
LORD of VERMIRION ~ 慟哭の転生者 ~

だしまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L O R D o f V E R M I R I O N ￣ 慟哭の転生者 ￣

【Nコード】

N 2 7 2 1 B A

【作者名】

だしまき

【あらすじ】

ちよつと悪役っぽい顔で、髪が白くて、眼は赤いけど、普通の高校生。そんな一般人がリシアの使い魔になる話。駄文です。

第零話 コンティニュー（前書き）

駄文です。遅筆です。オリ設定や、勝手な解釈あります。それでもいい方はどうぞ。

第零話 コンティニュー

七つの核石を己がものとし

七界の神魔霊獣を統べる英雄あり

その姿 《紅蓮》なるが故に

紅蓮の王 《ロードオブヴァーミリオン》と呼ばわる

されど 《紅蓮の王》

己が身を封じ永き眠りにつきたり

予言に曰く 《紅蓮》の先に二つの道あり

滅びを招く 《黒淵》の道と

滅びを破る 《白焰》の道……

二つの道に二つの運命 それは 予言された未来

絡み合う現と幻の境界線 それは 示された異なる未来の可能性

幾重にも重なりし輪廻を超え 予言に説かれぬ新たな道が生まれる

目覚めし 《紅蓮の王》が携えしは、解き放たれた第三の力

終焉を穿つ異界の徒と共に 新たな扉が開く……

俺、西野誠司は暗闇の中にいた。

——どこだ、ここ。

夢、か？それにしても、本当に何もない。

身体は……とりあえず動く。動くが、動いている自分の身体は見えない。闇に吞まれている。

「くすくす。ようこそ」

「！ 誰だ」

少年の声がした。姿は見えない。どこから聞こえてきたかもわからない。もしかしたら、少女の声かもしれない。

「初めまして。僕は『記録者』。歓迎するよ」

「『記録者』？」

「うん。ある者の、そして世界の旅路を、ずっと記録してるんだ」

「……よくはわからんが、ここはどこなんだ。俺に何の用だ」

とりあえず、俺はこの意味不明な状況について問いかけた。

姿も見えない相手と話すのは、正直不気味だが、出て来いと言ってもどうせ聞き入れてはくれないだろう。不思議と、何となくそんな気がする。

「君にはね、その世界に行ってもらうんだ」

「世界？何かよくわからないんだが……」

「いいよ。君は知らなくても。どうせここでの記憶はなくなるんだし。それより、これが君の性能だよ」

バチィッ、と電流が流れるような音がした。

西野誠司

不死 NOXXX

15コスト

HP 370

ATK 40

DEF 40

SPEED 3

闇属性 単数攻撃

弱点属性 -

フィールドスキル シールド ガード

サポートスキル -

特殊技 転生の秘術

範囲内の味方一体を吸収し、攻撃力、移動速度、攻撃速度が一定時間上がる。効果時間後、吸収した味方は元に戻る。「時・遅」

「——っ！今のは……」

何だ？今、脳内に直接情報が……

「それが君の性能だよ。特殊は疑似サクリで、スキルも悪くない。強めに見てみたよ」

「おい……何なんだ……今の……」

痛い……頭が……割れそうだ。

「じゃあ、早速だけど、君はこれから紅蓮の王の使い魔として、召喚されることになる。幸運を祈ってるよ」

「あ……」

プツンと、テレビの電源でも切るかのように、意識がブラックアウトした。

降魔(?) 召喚(前書き)

書き忘れてましたが、普通にゲスト出てきます。嫌な人は戻った方がいいです。

降魔(?) 召喚

「見せてやるぜえー!!」

バリ、バリイッ。

エッジの落とした雷が、敵軍を切り裂く。その中でただ一人、『裁きの雷』ラムウは、エッジの攻撃を真正面から受けながらもともしない。

「雷よ!」

ラムウが手に持った杖を振るう。

「全てを貫け!!」

エッジのそれを超える紫電が、自軍に向けて降り注いだ。

それほどの雷をその身受けで止めながらも、半蔵は刀を構え、ミネルバはその手に炎を握る。

「覚悟めされよ!」

「荒ぶる炎よ、集え!」

ミネルバの放った炎に、とうとうラムウはその場に倒れ伏した。土埃が舞い、それすらも雷を帯びる。

「ぐう……儂も、衰えたか……」

苦しげにそう言い残し、ラムウは姿を消した。周りの使い魔も、それに応じて次々と消失する。

リシアは、血の臭いと、赤い核石だけが残った戦場を一瞥した。

「いったん引くわよ。次はラグナを連れてきて、そこで仕留めるわ」
リシアは血の滴るレイピアを軽く振ってから、鞘に戻した。

「承知」

短く応えて自軍ゲートに駆け出そうとする半蔵を、引き留める。

「次は総力戦だから、降魔を呼ぶわ。ゲートに行く必要はないわよ」
「うむ。あいわかった」

半蔵が頷いたのを確認して、リシアはレイピアの天に向けて掲げた。

U l t i m a t e S p e l l !

U l t i m a t e B r e a k !

ガラスが割れるような音がして、リシアの足元に召喚陣が展開される。

空からの光に貫かれ、リシア達の姿が消える。

煙が立ち込め、一人の人間のシルエットが浮かび上がった。

「ごぼつ、ごっほ、げぼつ……な、ど、どこだ、ここ……げっほげほ」

け、煙てえ。せ、咳が……やべ、えずいた。気持ち悪い……
涙目になって咳き込んでいるうちに、徐々に煙が晴れてきた。

「ど、どこだよここ……」

俺は辺りを見渡して、その景色に呆然となった。

そこは、光の届かぬ、暗い荒野だった。荒野には六つの、何か赤い石のようなものが鎮座している。周りには黒い樹木が立ち並び、それが光を遮っているようだ。

ここ……東京か？いや、違う。多分、日本で知らない。

人っ子一人見当たらない荒野を眺めていると、ふと女の声がした。
『ちよつと！？あんた誰よ！『覆滅の炎』をどこへやったの？』

「？ 誰かいるのか？」

声は……どこから聞こえたのかわからなかった。強いて言うなら、まるで、直接頭に響いてくるような……

『主よ。少し落ち着かれよ』

今度は、男の声。またも、どこから聞こえたのかわからない。

「おい！誰かいるのか」

声を張り上げる。

『ここだぜ。いい加減気づいたらどうだ？』

辺りを見ても、やはり誰もいない。まさか……

俺の中、とか？

『聞こえますか？少年。私はミネルバ。今、あなたの中にいます』

「おい、本当に俺の……中にいるのか？」

『そうよ』

最初に聞こえた、凜とした女の人の声だ。

『まず、そこは戦場よ。あなたは私の降魔、一時的な使い魔として召喚された。あなたの後ろにゲートがあるのかわかる?』

「え? あ、ああ。あれか」

振り返ると、薄く光る膜のようなものに覆われた広場が、三つ見えた。

『そこに向って全力で走りなさい』

「は?」

「いいから速く!」

「は、はいっ!」

よくわからないが、姿も見えない誰かの剣幕に気圧されて、俺は言う通りの方向に駆け出した。

降魔(?) 召喚(後書き)

ノルド街道って、どんなところだったけ? と思いながら書いてたので、
ところどころ変かもしれませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2721ba/>

LORD of VERMIRION ~ 慟哭の転生者 ~

2012年1月14日18時48分発行